

# 浄土

monthly  
JŌDO

September 2000



法然上人鑽仰会

21世紀もしゃべったる。

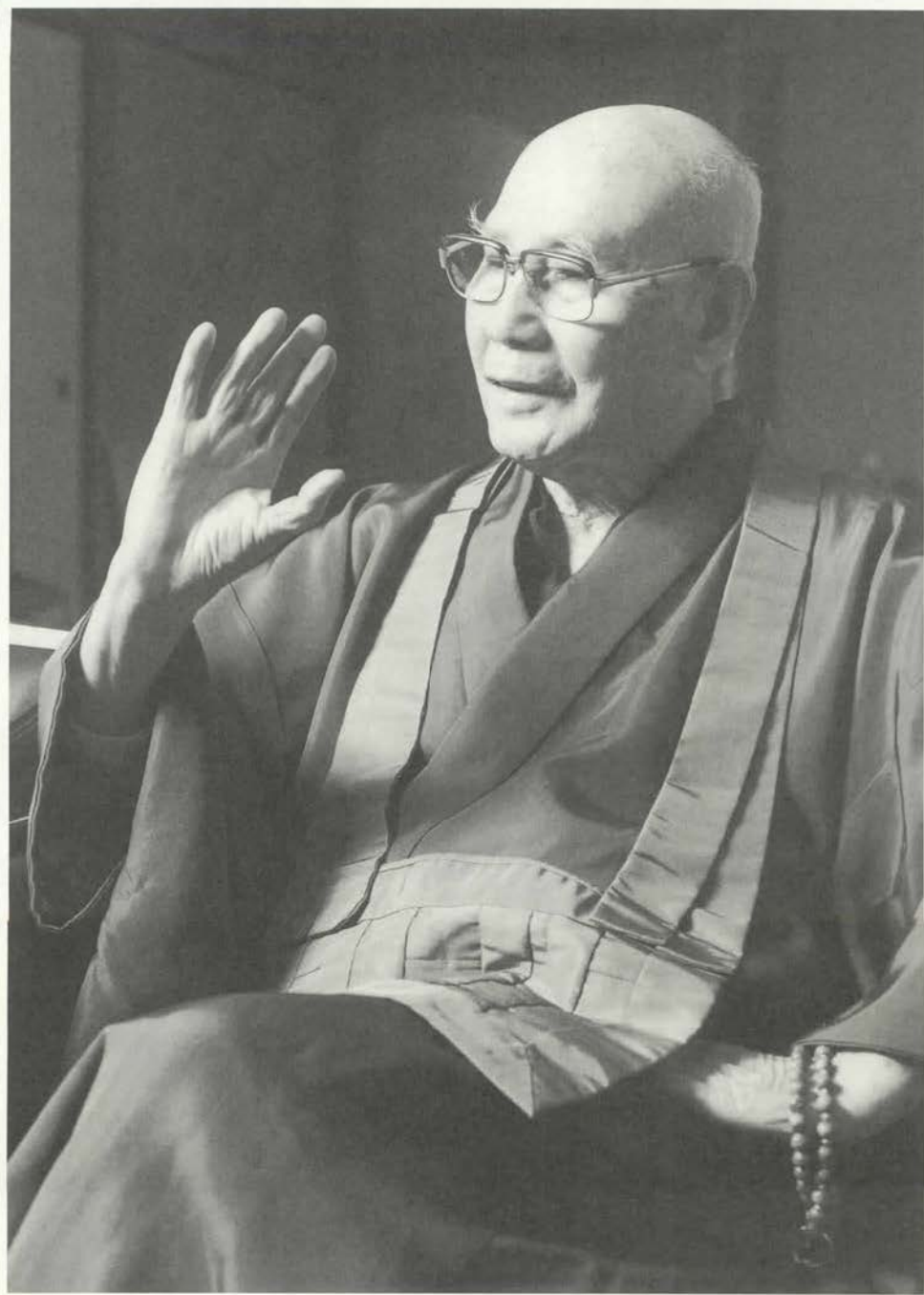
# OK!

市外も、国際も、  
インターネットも、  
携帯も、  
日本テレコム。



●お問い合わせはお客様センターへどうぞ ☎0088-82 (無料) (受付時間) 9:00～21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/>



追悼

元知恩院副門跡

鎌倉大仏の

# 佐藤密雄上人 逝く

鎌倉大仏高德院住職、元大正大学学長の、佐藤密雄上人が六月十五日午後三時三十三分遷化されました。九十六歳の御生涯でありました。密葬は同十八日、本葬は七月三十一日いずれも高德院において営われました。

佐藤密雄上人は明治三十四年、富山県に生まれ、京都の仏教専門学校（現仏教大学）を卒業後、大正大学仏教科の第一期生として入学。昭和二十二年に教授となり同三十八年からは第十七代学長となるなど、大正大学創立以来の歴史と共に歩まれました。学内では佐藤賢順（哲学）、佐藤良智（梵文）両氏と共に「三佐藤」と並び称せられ、仏教界の泰斗として大きな期待を寄せられました。

また法然上人鑽仰会会長として本誌、月刊「浄土」の発行人を戦後ながらく続けられ、本誌の成長を大きな力で支えて戴きました。

本誌は此処に謹んで哀悼の意を表し、本号を追悼号としてお送りしたいと考えるものがあります。

照燿心院通蓮社達譽上人深阿慧学密雄大和尚 御前に

# 弔辞

法類代表 天光院 真野龍海

愚僧若輩の頃より最も長く、先日まで、公私ともに、御指導を賜りました。私は、また、それ故に、今、最後のご挨拶をここに申し上げるに至りましたことは感無量であります。師恩を想起して万感交々至り、痛惜の情耐え難き中に、師のご厚情の一端を述べて追憶の弔辞と致したいと思ひます。

私は中学卒業後、仏教を学ぶべく仏教専門学校（現仏教大学）に入りましたが、そこで、先ず、佐藤先生より、仏教研究の基礎学の一つである梵語（インド古代語、サンスクリット）を、浄土宗の基礎典籍である浄土三部経の一つ『阿弥陀経』の梵語文を、指導されました。穏やかな教授ぶりながら、とにかくこれはこうと「覚えとけ」というのが口癖で口移しのように学習しました。その中に、私は梵語の初級と仏教、特に浄土教を学習できました。この『阿弥陀経』は私には現在も引き続き種々の学問上の示唆を与えております。

先ず第一に、「何故に阿弥陀と号したてまつるか」の所は、お経の中でありながら、議論の書物のようであります。この阿弥陀は、梵語から解すべきでなく、梵語風解釈、ニルクテイ（ニルクテイ、古来インドからの經典理解の常識ながら、仏教学では表面的に言われることがほとんどない）によって理解しないと、以下の、彼の仏 光明無量 壽命無量 人民無量という経文の意味がつかないのであります。これも、漢文と梵語の経文とを、この佐藤先生の講義で行われたように比較しないと気づかないのであります。私は最近もこのニルクテイを念頭に研究を進めております。

第二に冒頭に「阿弥陀今現在説法」とありますが、当時から私は「極樂往生した衆生がなぜまた説法聴聞という学習をするか」と疑問に思っておりました。私が近年、『初転法輪經』に注目し、如來（タターガタ）のニルクテイに、「ガタ」を「ガダ」「話す、説法する」という古來の理解があることを知って、仏陀、阿弥陀仏は説法するのが普通の姿と納得いたしました。この『初転法輪經』は、佐藤先生のご専門の律の最初部分に出て来るので、理由をお尋ねしましたら仏の悟りがあり、説法があり、僧ができ、教団ができて戒律の成立や伝授があるからであろうという御指不を得たことが懐かしく想起されます。

第三に、十方諸仏証誠の意味、その他、第四に、最近では「執持名号……其人臨命終時……即得往生」の主体の問題の梵本参考、等々あり、往事の学習、今に生きるの思いであります。

いつか、先生は、仏教の論書『阿毘達磨俱舍論』梵文を購読せられ、私にチベット文の翻訳を命じられた事があり、非力な私は悪戦苦闘し、難渋極まりなき訳文を呈し、汗顔の次第でありました。しかし、それは、梵漢蔵の対訳研究のよき機会を与えられたのであり

ました。おかげで、今も、その方法で、ある經典の和訳を続けさせてもらっております。インドの梵語で欠かせぬバーニ二の文法も、さすがに、チベット訳も欠落していることを見つけたのも、小さいが忘れられぬ事項でありました。

さて、私事ながら、先生は、私が天光院の真野を継ぐことについては、遠路わざわざ、新幹線もない時代に、私方、伊勢の天然寺、總代、母へと、説得に來られました。最近伺った事ですが、行雄様もお連れであったそうであります。母は法然上人の母のことを思い先生に同意したと言っております。まことに世話になった事であります。天光院責任役員としての御指導御支援も有り難い事です。

私が学術書の処女出版をし、先生にご報告と思っているうち、先生からお祝いのお電話を頂戴し、あれ買ったよ、との事でした。当然謹呈にと思っていましたのに、早速のお買い上げとは、恐縮するともに感激し嬉しく思いました。その後も、毎年の図書刊行目録も見ておられ、君の書名が出ているよとおっしゃってくださいました。いつまでも衰えぬ学問への愛情に敬意を表し、弟子への思いやりを、いつも有り難く感謝致しております。

法然上人鑽仰会が月刊『浄土』を刊行、六十余年、戦時中も続けられて今日に到っておりますが、先生には中枢にあつて支えていただきました。常夜灯のごとく、法然上人の教えを輝かせておりますが、先生のお光りも、その中で永遠に輝くことでありましょう。

本葬に当たり、先生からの御導きの中、一、二、三を申し上げて追善の誠をささげます。

平成十二年七月三十一日

# 佐藤密雄先生の 芳躅を慕って

宮林昭彦

あるとき、先生が京都の学会に出席されたあと、京大出身で花園大の森本省念さんと会うので随行することになった。お会いする前には、謹厳な学者タイプの森本先生を想像していたが、木綿の黒の法衣に下駄履きの姿の老和尚に出会った。先生が親しげに頭を下げると、「やあ」と低頭しただけで、花園大学の研究室へ案内され、広く仏教や禅の談義をされ、あまり世俗の話をせずに、一時を過ごされて、「じゃ、また」といつて別れて行かれた。先生は後ろ姿を追いながら一言「彼は昔と変わらんね」といいながら、その横顔は満足気であられた。先生が京都の仏教専門学校在学中、ある時期に上善寺に下宿されたことがある。そのとき、一緒に上善寺で森本さんと起居を共にされ、多大の薰陶をえられたという。後輩に対しても、学問的な指導を懇切にしてくれるが、しかし行の人で、草むしりをしながら、方々の禅寺に出入りして坐禅に親しみ修行した人であるといい、「人の感

化力というのは、言葉でなく、無言のうちに影響をあたえるのが本物かもしれない。」と言われた。

先生が上善寺から京都仏教専門学校に通ったのは、大正十一年、関東大震災の起きた前後である。仏教専門学校の校長は、小林隆浄先生で、宗学を中心に勉強された。やがて上京して宗教大学へ入られ、宗教大学から、大正大学へ移行する時期であった。大正大学の初代学長は沢柳政太郎、二代権田雷斧、三代望月信亨の歴代学長をはじめ、椎尾弁匡、渡辺海旭、荻原雲来の各先生等、キラ星の如き碩学が存在した時代であった。とくに先生は世界的梵語学者荻原雲来先生に師事され、そのときの友人が佐藤良智先生である。

先生は富山県の出生であるが、小学校一年生のときに、高岡の極楽寺に小僧に入られ、師匠の荻行密厳師について弟子となられた。この小僧生活の小学生のときに、すでに阿弥陀経を誦しておられた。先生は、小僧生活の厳しさはあまり語られなかったが、毎日檀家の月命日参りを五、六軒つとめ、それで学費や生活費は貯えられたのである。小学生の小僧さんが、寒い雪道を歩きながら、あるときには下駄の鼻緒が切れて裸足で檀家廻りをしている姿を想像し、小僧生活の厳しさを体験された先生の少年時代を偲ぶのである。先生の密葬のおり、三歳年下で現在九十六歳で躰かたいとしておられる妹さんが棺前でポロツと涙をこぼされた。

「子供の頃、月参りでいただいたお菓子を袂から取り出して私たちに与え、スタスタとお寺に帰っていく後姿を思い出していました。」と涙ながらに語られた。先生は昔話をされると、かならず「その当時はありがたかったねえ。」といわれた。先生は生涯、この小僧生活が礎となっておられたが、そのときの苦勞は決して表には出さずに、心底に

昇華されて、人生を生き抜かれたにちがいない。

○  
先生が大仏殿に入られたのは、昭和の五年であるが、住職は転法輪行念師であられ、神奈川教区の教務所長をなされ、大本山光明寺の末山会の会長もなされた徳者であられた。その当時の大仏さまは、小学唱歌にも歌われたように鎌倉の古き歴史を尋ね、露座の大仏を詣でる、いわゆる善男善女の方々が参拝するお寺であつた。行念老師は、草とりをしなから、大仏様の説明をし、説法をされておられた。

先生が大仏殿で結婚されたときの御戒師は渡辺海旭先生であられ、先生は独身であられたが仲人も兼ねられたようである。先生は行念夫妻の温かい寺庭のなかで研究活動が続けられるのであるが、昭和八年に再度京都へ出向いて、仏教専門学校の講授となられた。當時仏教専門学校の教授として、のちに芝学園長になられた松本徳明先生がおられたが、戦時下、ドイツ、イタリー、日本の三国同盟の締結の前後で、先生がドイツへ赴任されることとなり、後任として就任されたのである。先生にとつて、京都は新婚生活、研究活動の上でも思い出の深い年月であられた。浄土宗門人、仏専の教授の方々とはもちろんであるが、山口益先生が中心となつて、大谷大、龍谷大、京都大をはじめ関西の各大学の研究者との交流があり、テキストを読み、いわゆる京都学派の学風を学ばれた。先生の研究分野は戒律、とくに、律蔵の研究が主題であるといわれるが、実は先生は初期仏教阿毘達磨仏教の原典を綿密に解明され、それをベースに研究成果が展開されたのである。

先生は昭和十六年より大仏殿の住職に晋しんとう董されてから、六十年になろうとする。京都よ

鎌倉に戻られてから、大正大学において学問研究は続けられるわけであるが、昭和十年には、天光院住職、元大正大学学長真野正順先生が法然上人鑽仰会を設立され、その運動に同人として参加された。この運動は、法然上人は、単に一浄土宗の宗祖としての法然上人というだけでなく、念仏の元祖であり、日本仏教における救済者としての法然上人を鑽仰する必要性をもとめて提唱された。この趣旨に賛同された人には、当時の文壇を代表する、中里介山、佐藤春夫、吉田絃二郎の方々や、椎尾弁匡、中村辨康、大野法道、矢吹慶輝の各先生達や、佐藤密雄、佐藤賢順、佐藤良智、中村康隆などの当時の新進気鋭の先生方が参画されたのである。今、ご健在なのは中村猥下だけになってしまった。あれから七〇年近く同人の代表をされながら、「君たちは、余りむずかしいことを云わず、法然上人に還って念仏せにや」と時折りちくりと諭されたことなど懐かしく思い出される。

○

先生が戦後最初に海外に出かけられたのは、昭和三十五年、ドイツマールブルグ大学の国際宗教学史会議であるが、その後アメリカ、ヨーロッパにご夫妻で出向かれ、また東南アジア、とくにインド、パキスタン、アフガニスタン、サマルカンド、タシケントなどのいわゆるシルクロードも再三調査され出掛けられた。アフガニスタンのカプールで、スタインの墓を見つけたとき、「やはり現地に來てみなければ、わからんなあ」といわれ、長時間周辺を探索して少年のように目を輝かせた思いもある。また旅をして、危険をおかして無理をしようとする、「楽しみは次に残しておくことも大切だよ」ともいわれた。

鎌倉は観光地のため寺門のあり方も問われ時流の中で観光税の問題が起きたとき先生は

文化財としての大仏の保護と宗教施設としての環境づくりには苦心された。茶道や生花、そして文化講座を開いて、日本の文化を広く伝え、仏教講座、法話の会を通じて教化活動を行なわれたが、内助を尽くされたのは治子夫人であられた。

先生はシャイな面と一面反骨精神もあってあまり心をさらけ出すことも少なく、やや誤解される面もあられた。しかし、「僕は向いていないよ」といいながら、引き受けると誠実に約束をまもり滅私奉公的な面があった。そんなに無理しなくても廻りが思っても、「いや、これは果たしてやりにや」といわれて、忠実に全うされることも屢々しばしばであった。晩年、ご長男の行信さんの遷化の折も、「しかたがない。若いといっても無理をしてはいかんよ。」と諭すようにいわれて、しばし無言であった。枕辺で阿弥陀経を幾度も読誦され、回向しておられたが、その姿にじつと堪えながら言いしれない無念さを見るような気がして先生の情の深さを感じた。出棺のとき棺を抱きながら「わしを送る立場なのに」と一言いわれて絶句されたのは万感の思いがあらわれたにちがいない。やがて行信師の一周忌を迎えた間近の十月九日誕生の日、毎月催された法話会の人々が白寿の誕生を祝してくださった。「長生きすることは恥多しの心境だが、今日はうれしい。」と満面微笑みを浮かべられ、「生死一如」と揮毫された。

思い出は尽きないがつれづれに綴って還来を念じたい。

# 佐藤密雄博士略歴

出生地 富山県高岡市片原町七番地  
 本籍 神奈川県鎌倉市長谷四丁目二番二八号  
 現住所 本籍に同じ

## 佐藤密雄

明治三十四年十月九日生

## 年次 履歴事項

大正十一年三月三十一日 富山県高岡中学校卒業  
 大正十四年三月三十一日 京都仏教専門学校卒業  
 昭和四年三月三十一日 大正大学文学部仏教学科卒業  
 昭和八年九月一日 仏教専門学校講師  
 昭和十五年四月一日 大正大学専門部仏教科講師  
 昭和十六年四月十日 大正大学学部講師  
 十二月二日 鎌倉大仏殿高徳院住職となる  
 昭和十九年四月一日 大正大学助教  
 昭和二十二年四月二十一日 大正大学教授  
 昭和二十三年五月十九日 大正大学評議員(昭和二十六年五月十九日迄)  
 昭和二十八年十二月十日 浄土宗教学院主幹  
 昭和三十年二月十日 浄土宗教学院理事  
 四月十八日 大正大学仏教学部仏教学研究室主任(昭和三十九年三月三日迄)  
 七月二十一日 大正大学図書館長(昭和三十六年十二月十日迄)  
 昭和三十三年十二月一日 日本仏教学会理事(昭和四十二年三月三十一日迄)  
 日本宗教学会評議員(現在に至る)  
 十二月十日 日本印度学仏教学会理事(昭和四十二年三月三十一日迄)  
 十二月十一日 大正大学仏教学部長(昭和三十八年十二月二十一日迄)  
 大正大学浄土宗学監  
 昭和三十五年二月二十七日 文学博士の学位を得る  
 九月十一日 ドイツマールブルグ大学における第十回国際宗教史

会議に日本代表として出席 "Japanese Buddhism in the Kamakura period" を発表  
 二カ月にわたりアメリカ・ヨーロッパ各地の大学  
 教育事情視察  
 昭和三十八年四月十五日

十二月二十二日 大正大学学長(昭和四十一年十一月迄)

昭和三十九年三月一日 浄土宗僧階 正僧正叙任 浄土宗教階 正讃教叙任  
 昭和三十九年四月二十三日 バキスタン(カラチ)へ出張  
 昭和四十二年三月二十一日 ソ連(シルクロード)の宗教事情視察  
 八月二十三日 中央アジア(バキスタン・アフガニスタン) 仏跡調査  
 昭和四十五年一月二十一日 台湾彰化大仏参拝  
 二月十三日 インド日本寺落成式導師とし出仕  
 三月二十五日 浄土宗学階 勸学叙任  
 昭和四十六年四月二十五日 浄土宗総本山知恩院顧問  
 七月二十三日「日韓仏教親善セミナー」派遣団長として韓国へ  
 昭和四十七年二月二十六日 東南アジア(タイ・ビルマ・インドネシア・ボロブドール) 仏跡調査  
 三月二十一日 大正大学停年退職  
 四月一日 仏教大学教授(五十八年まで)・大正大学講師  
 四月二十九日 叙勲三等瑞宝章  
 昭和五十二年四月 総本山知恩院副門跡(五十四年十一月退位)  
 平成三年 仏教伝道功労賞受賞

著書

論事附覽音註 昭和八年四月 大東出版社（佐藤良智氏共著）  
薩婆多毘尼毘婆沙 〇九年八月 国訳一切經（印度部・律部十六）  
分別論上 〇十二年四月 南伝大蔵經第四十六卷  
論事上 〇十四年九月 同 第六十七卷  
分別論下 〇十五年三月 同 第四十七卷  
無量壽經講話 〇三十一年十二月 河出書房  
仏祖統記上 〇三十四年六月 国訳一切經（和漢部・史伝部二）  
同 中 〇三十四年八月 同（同三）  
同 下 〇三十五年五月 同（同五）  
原始仏教教団の研究 〇三十八年三月 山喜房仏書林  
大乘戒 〇四十二年六月 大道社  
仏教教団の成立と展開 〇四十二年十二月 教育新潮社  
律藏「仏典講座」四 〇四十七年五月 大蔵出版株式会社

論文

法学的見解による律藏と僧伽について 昭和五年八月 大正学報  
布薩及び安居に依る僧伽の発達 六年二月 大正学報  
部派仏教の規定の仕方 六年四月 第二回宗教学大会紀要  
部派に於ける異執二百十六論事と其解説 七年八月 仏教学徒第二輯  
仏教僧伽の訴訟裁判法 八年十月 仏教学報  
巴利仏教研究叢書 九年三月 仏教学徒第三輯  
仏教の根本問題——五蘊と二種縁起について—— 十年一月 大正学報  
戒と律との発生について 十一年十二月 大正学報  
聖論分別論 十一年三月 仏教学論叢  
三世実論の法と有の觀念 十三年一月 仏教学  
仏教教理史上の諸法有論の地位 十三年四月 日本仏教学協会年報  
輯 仏教思想の理論的立場——行の解釈的序説—— 十四年九月 仏教学徒第六輯  
原始仏教研究 十六年十二月 仏教研究

仏教無我の日本の性格 十七年五月 大正学報

支那南北朝に於ける中道説 十九年七月 仏教研究

具足戒の効用について 昭和二十七年二月 東洋学論叢

（小西・高島・前田三教授頌寿記念）

經藏の戒律 二十七年八月 宗教研究

現法涅槃について 二十七年十二月 宗教研究

仏教の戒律の性質 二十八年十二月 宗教研究

十誦律の訂正 二十九年三月 印仏研究

諍論諍事の現前毘尼減について 三十年十一月 山口博士還暦記念論文集

印度学仏教学論叢

俱舍論賢聖品の三十二行相について——弥友の俱舍釈によって—— 三十

五年十一月 福井博士頌寿記念

東洋思想論集

律藏に於ける受具（upasampada）について 三十六年二月 塚本博士頌寿記

念仏教史学論集

律藏に於ける受具羯磨後の教誡について 三十八年六月 岩井博士古稀記念

典籍論集

金錢求利についての比丘戒 四十二年十月 金倉博士古稀記念印度学仏教学

論集

原始仏教の教団理念 四十三年三月 芳村修基編仏教教団の研究

戒の解釈について 四十四年十二月 福井博士頌寿記念東洋文化論集

比丘性と戒体（無表色） 四十六年三月 芙蓉先生古稀記念密教文化論集

山学報第十九輯

戒体と戒の体 四十七年三月 恵谷先生古稀記念浄土教の思想と文化

再録・昭和29年「浄土」第二十卷六月号より

# 無常と三つこと

## 「二人の佛教女性之死」

佐藤密雄

### (一)

無常とは何ごとに依らず移り變ることだと  
言われる。その意味では、彼岸すぎから初夏  
への風物ほどこに移り變りのすがたを鮮やかに  
あらわすものはないと言える。然し乍ら、無  
常の意味は、まことには物事の移り變りを言  
うのであるが、然し春から夏への景色の變  
化などを見て、無常のことわりなどを感じ得  
るものではない。凡そ言葉には歴史を通じて  
身につけた語感と言うものがある。季節にす

るなら晩秋である。無常の花とは言えぬが無  
常の風とは言う。浄土から「無常と言うこと」  
を書く様に命ぜられた。眞野龍海編輯氏の考  
えでは、書家の風物の變りの早さを捉えて、  
多少の感傷を込めたさなりとした無常談義を  
させる考えであつたと思われる。然るにその  
様な甘い想像をして居た時に、ほんとうの無  
常の嵐が私の近くを吹きすぎた。

五月十一日に鎌倉で、私の先代の十三回忌  
の法要を営み、中村康隆君にも參會を求めた

ところ、「義弟が目下重態で行けぬかも知れない」との返事であつたが、十一日午後、その中村が来て呉れたので、「義弟君の病状はどうだ」とたずねると、「まあと言ふ程度に落付いたのでお参りに來たのだ」と言ふことだつたので、ではゆつくりと言ふ譯で引留め、一泊を強い、君も其氣になつて泊つたのである。

中村君が先年、自坊の本堂を作られた時に、私の所にあつた三尊佛をお送りした所、お本尊佛にして頂いた。私の所では、先々代が持佛として居たもので、其後脇壇にあつたので、それが清水の、然も近代寺院建築の標本として建築の雑誌にも紹介されたお寺の本尊にお出世になつたのであるから、私共一家は自祝自慶して居たのであるが、中村君と、恐らく母堂が、氣にかけられ、お禮として、近世の聖僧辨榮上人の極彩色の釋迦三尊佛の三幅仕立を當日持参下さつた。上人の墨蹟は多いが、此様なものは他に類がなく私共には未見の立

派なものであつたし、又實相寺の寺寶でもあつた由をき、居合せた人達と共に讃歎し、中村君一家の好意に感謝し、此を中心に夜の更くるを知らず歡談したのである。

## (二)

然し無常迅速であつた。鎌倉で中村君が私共と歡談しつづけて居る間に、無常の嵐は中村君の母堂に吹きつけて居た。私は其後未だ清水にお参りしないので、充分に様子を知り得ないが、二三の人からきいた所に依ると、十一日弟君の病氣看護に赴かれた母堂は、其夜おそく、つかれた體を實相寺へ歸られる途中で、路上で發病せられ、苦痛と共に次第にうすらぐ意識をかり立て乍ら、路行く人に「實相寺は何處か」と訪ねられたと言われる。路上にうずくまり、更に勇をこして歸宅せんとされたが、うすらぐ意識は多年住みなれた實相寺を目前にしつゝも、此を確認出来ない状態にまで立至られたのであらう。ついに途上に意識を失われ、明くる十二日朝になつて

通行の人が發見して實相寺にお知らせした時は、たゞかすかに心臓が生の最後の鼓動をなして居ただけであつた由である。

病人の所へお出になつたので、寺の方々はいつもの通り泊りがけと信じて居られた由であるし、中村君は、病人である弟君の病状の落ちつきに一安心の態で鎌倉で一夜を過して居たのである。母堂は、住職の中村君の留守なるを思い、夜更けを押して歸られたのであるが、知らず、其れが人生の終りをお本尊様の膝下へと急がせることになつて居たのである。

中村君の母堂は、「淨土」の育ての親なる中村辨康上人の夫人である。中村上人は長年宗門の要職にあり、其後は淨土を中心に全國を布教されて居るのであるし、子息の中村君は學者で、此二人をして各々の方面で一家をなさしめたのは母堂であつた。特に二人の輝かしい功業は大戦前から戦時であつたが、此の間、實相寺を維持して居たのは母堂であり、

中村君が清水に歸つた後も、恐ろしい戦災から輝かしい復興に至る間を子息をたすけはげまして、此を完成せしめたのも母堂である。此の母あつて、中村君の努力は功を奏し、此の夫人あつて中村上人の業は成つたのである。夫人の最後は、お體をお寺に運び入れてから脈が絶えたと傳られる。文字通りお寺に捧げられた生涯だったのである。私共、母堂のけんきよで然も何人にも親切をおしみなくなされたこと知るものは、今その最後をいろいろと意味づけて考えたい衝動にかり立てられて居る。

母堂の念佛行者であつたことは言うをまたないが、その生涯の尊さは、近代妙好人であつた。

私は五月十四日夕刻、京都の學界に出發すべく東京に居たが、鎌倉から至急電話で此の不幸をき、驚いた。重態の人が快方に向い、看護の人が急死するとは、私達は、かつて、荻原雲來先生が重態になられ、此を案じ見舞

われた渡邊海旭先生が間もなく急死されて、萩原先生が渡邊先生の弔辭を讀まれたことを覚えて居る。其折も生死はかり難しと思ひ、此をば無常と言うと思つたが、いつとはなしに此を忘れ、道心を怠つたまゝで居たが、今、中村君の母堂に依つて再度警覺されることを得たのである。三度目とならぬ様に、今日から、道心發起を迫られた感じである。

(三)

京都から歸ると、三河の大樹寺のお貫主、淨土の教學部長の佐山先生夫人も、五月十二日急逝されたことを知つた。夫人も亦、中村君の母堂と同様に、父君と子息を功あらしめて居た方であつた。佐山先生は、アメリカと中國の東西をかけて、佛法弘通につとめ、戦後は南方の日本人戦犯者の父として海外に活躍されたが、此をなし得たのは夫人の功に依ると言つても過言でなく、その様なお子息を立派な紳士に育て上げられたのである。けんきよに、宗教者の夫人として積功累徳さ

れたのであるが、然も内に識見を藏することでも深くあつたのである。人々は接すること親しきにつれて、暖くも美しい品格と叡知に觸れたと言われる。私は未見の方であつたが、知遇を得た人々は、佐山先生を語るには先ず夫人を前提としたのである。佐山夫人も亦、佐山先生やお子息の留守を、徳川家累代の菩提寺なる大樹寺を、守りつゝ、生を終えられたのである。

無常とは「移り變りること」と言う様なことではない。死の迫る人生のことである。念死念佛こそ無常の用心である。



# 浄土

2000/9月号 目次

|                         |             |
|-------------------------|-------------|
| 追悼 佐藤密雄上人 .....         | 1           |
| 弔辞 .....                | 真野龍海 3      |
| 佐藤密雄上人の芳躅を慕って .....     | 宮林昭彦 6      |
| 略歴 .....                | 11          |
| 再録 無常ということ .....        | 13          |
| 目次 .....                | 17          |
| 神々の閉ざされた世界を開いた仏たち ..... | 三橋 健 18     |
| 連載 法然上人をめぐる人々 .....     | 石丸晶子 26     |
| 列伝 中野善英 .....           | 土屋光道 32     |
| 響流十方 .....              | 林田康順 36     |
| こどもの俳句 .....            | 40          |
| コラム 浄土宗と浄土真宗 .....      | 42          |
| Jフォーラム .....            | 43          |
| 浄土誌上句会 .....            | 選者＝増田河郎子 44 |
| マンガで楽しい仏教用語 .....       | 藤井ひろし 47    |
| 編集後記 .....              | 48          |

表紙題字＝浄土門主 中村康隆宛下  
表紙撮影＝芝崎慶三  
アートディレクション＝近藤十四郎  
協力＝迦陵頻伽舎



神々の  
閉ざされた世界を  
開いた仏たち

三橋 健

國學院大學教授

## 神と仏の交渉史

神道と仏教は、およそ千四百余年にわたって交渉を続けてきた。その長い交渉の歴史を振り返って見ると、総じて両者は良い関係にあったといえよう。そのなかでも注目されるのは、他国にはあまり類例を見ない神仏習合という宗教構造である。

諸宗教間の対話が叫ばれている今日、この神仏習合から学ぶべきことは少なくない。また、二十一世紀の宗教は如何にあるべきかという問題を考える時、私どもは、神仏習合とは何であったのかを再考して見る必要がある。

いうまでもなく、神道は日本固有の民族宗教であり、仏教は民族や国家を越えた世界宗教であって、両者は性質を全く異にしている。そのような二つの宗教が、長い道のりを共に歩んで来ることができた理由を知りたいものである。

## 日本人の重層信仰

明治元年、いわゆる神仏分離令<sup>しんぶつぶんりれい</sup>が出され、神仏習合の歴史は表面的に幕を閉じることになった。しかし、一般民衆の心の中には、いまだに神と仏は同居しているように思う。私どもは、無慈悲な仕打ちにあった時などに「神も仏もあるものか」などといったっており、これを分けて「神はあるものか」「仏はあるものか」などとはいわない。また「神仏は見通し」「神仏に祈る」などという言葉もよく聞くところである。

一般的に言って、日本人は神と仏という二つを、一つと見てきたように思う。「神と仏は水波の隔て<sup>すいははへだた</sup>」というように、両者はあたかも水と波のような関係にあると理解した。形

は違っている、もともとは同体であるというのが、日本人の伝統的な神仏観であり、それは今も民衆の心に生きつづけている。

例えば、一家の中に神棚と仏壇がある。神棚には神道の神々を祭り、仏壇には仏像や先祖の位牌を安置してある。このように同じ家のなかに神道と仏教という二つの異なった宗教が併存している。これが一般的な日本の家庭である。

田舎へ行くと、神社の氏子総代と寺の檀徒総代を兼ねている家は少なくない。結婚式は神社で、葬式は寺院で行なう人も多くいる。また、除夜の鐘を聞きながら寺の本堂で祈っていた人が、その足で氏神社へ初詣にでかける姿は、さほど珍しいことではない。私の知人の家では、ご主人が神社世話役をしており、奥さんは熱心な日蓮宗の信徒、そしてお嬢さんはカトリックの信者である。同じ屋根の下に、神道と仏教とキリスト教とが同居しているのである。

このような日本の家々や人々に見られる重層信仰は、神を唯一絶対の存在として信仰している一神教の人々、例えば、キリスト教徒やイスラム教徒たちの目には、奇妙に映り、その理解に苦しむことであろう。

## 神仏習合の始まり

仏教の受容をめぐる、賛否両論はあったものの、結局、仏教は着実に全国へ広まっていた。国ごとに国分寺や国分尼寺が造立され、氏族一門の帰依した氏寺も建てられた。このようにして、多くの日本人が仏教徒になったが、人々は仏たちに帰依するために、古来の神々に対する信仰をすてなければならぬとは思わなかった（中村元著『日本人の思

惟方法」。

奈良時代に入ると、神仏習合は著しくなるが、その兆しを『日本書紀』用明天皇即位前紀の「天皇、仏法を信じたまひ、神道を尊びたまふ」との記事に見る思いがする。ここに天皇が仏教と神道の二つの異なる宗教とともに尊信されていることに留意しておきたい。また、この記事は神道という語の文献上の所見としても注目されるものである。

つぎに用明天皇の皇子である聖德太子は、推古天皇十二年（六〇四）四月に、十七条憲法を制定、その第二条で「篤く三宝を敬へ」と述べて仏教を奨励した。三宝とは仏・法・僧のことで、要するに仏教を信仰せよとの意味である。また、太子ご自身も仏教に深く皈依され、法隆寺、四天王寺など多くの寺院を建立して、仏教の振興に尽力した。

これに対し、同じ推古天皇十五年（六〇七）年二月、天皇は次のように言われている。「歴代の天皇は政治を行うにあたり、神々を篤く敬い、山川の神々を祭つてこられた。我が御世においても、神々の祭りを怠ることなく、さらに神々を礼拝せよ」と。

このように推古朝を中心として、その前後の飛鳥時代においては、仏教と神道の二つの宗教を合わせて崇敬していたのであり、神仏の交渉の歴史は、早くから始まっていたものと思われる。

## 神身離脱説から本地垂迹説まで

神仏の交渉が進むにつれて、私たちの目には、神々は迷える衆生の一つとして映ったようである。つまり、神々は煩惱に苦しんでいる身であると理解し、これを神身と称したのである。そして苦悩する神々は、仏たちの功德によって救済されると説き、神々も迷いの

神身を離れて仏教に帰依したいと願っていると延べた。これは恐らく民間で活躍した僧たちによって唱えられたものであり、一般に神身離脱説と称されている。

ところで、このような神身離脱の思想を背景に、各地に神宮寺が建立された。それは一般に宮寺と称されたが、別に神願寺・神護寺・神宮院・神供寺ともいい、また、別当寺ともいった。越前国（福井県）の氣比神宮寺は古い例証の一つで、『家伝 武智鷹伝』によると、靈龜元年（七一五）、氣比神が藤原武智麻呂に「我れ、神身となつて久しいが、今は仏道に帰依したいと願っている、我がために寺院を建てて欲しい」と託宣したとあり、この託宣にもとづいて氣比神宮寺を造立したと見える。その後、若狭比古神願寺・多度神宮寺・鹿島神宮寺・伊勢大神宮寺など、各地の有力な神社に神宮寺が造立され、そこには社僧がいて、神社の祭りや経営にたずさわっていた。このような傾向は諸国に広まり、その数も次第に増加していった。

一方、寺院のなかに神々を勧請することが見られた。これを鎮守社といった。そこに祭られ神々を、護法神・伽藍守護神・寺院鎮守神などと称した。有名なのは、天平勝宝元年（七四九）に、奈良東大寺の鎮守社として祭られた東大寺八幡社である。現在の手向山八幡神社のことである。鎮守社は神々が積極的に仏教および寺院を守護するという思想を具現化したものである。

平安時代に入ると、神々の前で読経をとえ、写経を行うことも見られた。それとともに神々を菩薩ないし大菩薩と呼ぶことが流行した。有名なのは八幡大菩薩である。また、熊野権現・白山権現・春日権現などのように、権現号を付すことも盛んになった。権現とは、仏たちが衆生を救うため、仮に神々の姿をとつてこの世に現れてくることである。

## 閉ざされた世界から開かれた世界へ

このように神々を菩薩とか権現という仏教風の名称で呼んだのは、神々が苦悩の世界から離脱して仏たちと等しい地位にのぼるようにとの思想によるものである。このような思想を経て、やがて神々と仏たちは表裏一体であるという神仏同体説が登場した。ついで平安中期になると、この説を受けて本地垂迹説が盛行した。本地である仏たちが、衆生を救うために神々という垂迹の形をとって、この世に現れてくるという説で、仏本神迹・和光同塵、あるいは和光垂迹の思想を背景にしている。

このようにして、著名な神社の祭神には、すべて本地仏が定められ、神社の中にはそれを安置する本地堂も建立された。本地仏は時代により変化が見られ一定していない。例えば、伊勢神宮の場合は盧遮那仏とされたが、後に観音菩薩ともいった。また、八幡宮は無量寿如来、あるいは阿弥陀仏ともいわれた。

本地垂迹説は鎌倉時代には整備、理論化されて、その後の神仏習合思潮の基底となっていた。

ところで、元来、神々の鎮まる神社は閉ざされた世界であった。例えば『万葉集』に、  
木綿懸けて 斎くこの神社 越えぬべき 思ほゆるかも 恋の繁きに  
と歌われている。これは禁じられた激しい恋心を歌ったものであるが、それを神社にたとえているところに興味を引かれる。木綿の紙垂をかけ、しめ縄を張り巡らして神々を祭る神社は、踏み越えてはいけなく、その神社ではないが、この恋も踏み越えてならぬのに、あまりの激しい恋心のために見境もなくなってしまう、踏み越えて入り込んでし



しめ縄を幾重にも張りめぐらして  
神々は閉ざされた世界に宿る

まいそんな気がすると歌っている。

上述したように、神社は足を踏み入れることを禁じられた聖地であり、鳥居・しめ縄・玉垣・榊などは、そこが閉ざされた世界であることを示している。また、前掲『万葉集』に「神社」をモリと読んでいることが注目される。モリは鎮守の森などというように、森の字をあてる場合もあるが、古くは杜の字をあてた。『岩波古語辞典』の「もり」の項には、杜と森の字をあて「樹木の茂った、神社など神聖な靈域。神の降下してくるところ」と説明してある。しかし、杜は杜絶されたとの意、つまり閉塞された聖地で、必ずしも樹木を必要としないのである。ただ、禁足地であつたので、おのずと鬱蒼と茂った森となつていったのである。

ところで、神々は仏たちとの交渉を通して、閉ざした世界を開いていった。それが一つのピークを迎えたのは本地垂迹説である。つまり神々は本地を持つことにより、固有から普遍へと変わることができたのである。

例えば、地域の神々は、その地域や住民を守護するが、地域外とは無関係なのである。そのことは今も見られ、例えば、氏神社には一定の氏子区域というのがあつて、その区域内の土地や住民は守るけれども、それ以外とは関わりをもたない。ところが、その氏神社の本地は観音となれば、観音は地域を越えた仏なので、地域外の人々からも信仰される。つまり、神々は本地仏を持つことにより、閉められた世界を開いていったといえよう。本地垂迹説とは、仏たちと神々とは平和的に共存するために工夫された日本特有の方法であり、二十一世紀に生きる諸宗教間の対話に、大きな示唆を与えてくれるものと思う。

## 萩の寺

天正元年（1573）、念仏僧魯道によって開創された常林寺（板倉宏允住職）は、昔から「萩」で名を馳せてきた。

「常林寺さんは？」と道を尋ねると、誰もが「ああ、萩のお寺さんです」と教えてくれるほど、京の人々に馴染み深い。

山門をくぐるやいなや、境内に所狭しと咲き誇る可憐な萩の花が参詣者をやさしく迎えてくれることだろう。

九月上旬から彼岸にかけてがその時期で、例年、九月中旬の日曜日を中心に行なわれる「萩供養」では、二条流煎茶の茶席や句会、講演会なども催され、京の仲秋の風物詩となっている（伽藍修復工事中により本年は休止）。

上枝の はぬるは跳ねて 萩の晴（鈴鹿野呂呂）



写真／水野克比古



# 常林寺

光明山  
攝取院

京都市左京区田中下柳町3 3  
※お車での参詣はご遠慮下さい。

「書きおろし連載小説」

# 石丸晶子

法然上人を  
めぐる人々

式子内親王の生涯（第二部）

第八回 残された人々

## 一十二

それから半刻あまりのち、院御所からの使いをうけた義経は、法皇の私室にちかい一室で、ひな壇に座す後白河と八条院の問いをうけていた。

鎌倉につれていかれる前、南都を焼亡させた罪の懺悔をしたい、という重衡のねがいにたいして、はじめは首をたてにふらなかつた後白河であるが、ついに八条女院の涙の嘆願に負け、この夜ふけの義経よびだしとなったのである。

義経が座している板敷にはいくつかの燭台がおかれ、外廊にかけてのあたり一帯をあかるく照らしだしている。

しかし法皇と女院が座す簾でしきられたひな壇のほうは灯をくらくしてある。

したがって、後白河や八条院のほうからは灯に照らしだされた義経がよくみえるけれども、義経がいる板敷からは、かすかに人影のけはいがするだけで、簾の

なかにはよく見えない。

義経からすこしはなれて、法皇側近の殿上人たちであろう、数人の公卿が衣冠すがたで義経をみつめていた。

公卿の日記などを読んでみると、どうもこの時代、彼らにはいわゆる九時から五時までが勤務時間、というような感覚はなかつたようだ。

というのも、院や天皇のお召しとあらば、彼らは昼夜の別なく御前に侍し、夜ともなれば灯火のほかげで、よもやまばなしに花を咲かせている。

彼らの日記を読んでいくと、一体いつ睡眠をとっているのか、ふしぎに思う。

「頼朝は、虜囚となりし平家にたいしてはすべて鎌倉に護送して裁きをなしたいと、かねてより申してきていたが、このたび重衡がとらわれたについて、何ぞ鎌倉からいつてきておるか」

じじっと燭台の油が音をたてて燃えた、とおもうと、簾のなかのひとつの人

影がかすかにうごいて、後白河の太い声がひびいた。

「はっ」

その声に義経が一礼すると、

「鎌倉の使者は、三位殿を洛中にひきまわしました前日の夜、九郎のもとにとどきました。旬日中にも護送の侍どもを鎌倉からつかわすゆえ、それまできびしく警護いたせ、との命令にございます」

## 二十二

「手荒なことはなりません。手荒なこととはなりませんぞ」

灯火であかるくてらしだされ、かるく両手をついて後白河の問いにこたえている義経にむかって、とつぜん、簾のなかの八条院が声をかけた。

女院はつづけて、

「朝敵になったとはいえ、重衡が西海におわす先帝（安徳）のおじ君であるのにかわりはありません。忘れてはなるまい

ぞ」

そのとき、「九郎殿」とたれさがった簾のかたわら、後白河と女院がいるひな壇にもつともちかい場所にひかえている藤原光雅が声をかけた。

光雅は法皇寵臣中の寵臣で、いまふうにいえば秘書官長の役職にいる公卿である。

「女院様のおことはである」

と彼はいった。

「しかと心にとめおくように」

「女院様の御ことは、九郎、必ずやお守りいたします」

簾の中の人影にむかって、義経は深々と平伏した。

とそこへ、

「光雅」

後白河のするどい声がとんだ。

「それ」

法皇は寵臣に何ごとかを促した。

「はっ」

光雅は一礼すると、

「重衡は南都を焼亡した極悪人なれど、このたび鎌倉下向のまえ、お上にはかくべつの御なさけによつて重衡にその罪を懺悔することをゆるす思召しである」

義経をひたとみつめて、寵臣は法皇の意思を伝えた。

「ただし、叡山等、朝廷よりその身分を下賜されておる僧は、いかなる者といえども重衡に対面することはならぬ」

「しかと承りました。して、思召しの僧がおりましたようや」

義経は訊ねた。

「されば」

光雅はひとつ咳ばらいをすると、

「お上には、東山に住す法然房に重衡を対面させたい思召しである。市井に住む民衆済度の聖なれば、おかまいなし、との御慈悲である」

「かしこまりました」

義経は簾のなかにむかつて一礼した。

その彼の背に、

「懺悔させるのみにて、もとより、出家等のことはまかりならぬ」

後白河のするどい声がとんできた。その声のあとから、

「官位はのうても、法然房は尊い聖じゃ。粗忽があつてはなりませぬ。手あつう、聖をもてなされよ」

八条女院の声がつづいた。

## 二十三

ふたたび夜の洛中を騎馬で宿舎にもどつた義経は、すぐ、武蔵坊弁慶をよびよせると、法然と重衡を対面させる手はずについて相談をはじめた。

小柄な義経と大男の弁慶のあいだで、燭台の灯がまたたいている。

「三位殿を民衆教化の聖におあわせするように、との御沙汰であつた。八条女院さまも出御されての」

またたく灯影に目をやりながら、義経

がいう。

「はっ」

弁慶はあるじの次のことばを待っている。

「そなた、法然房という聖をきいてか。東山の辺に住んでいるそうだが」

「われらは京にあつていまだ日数がたたず、市中のようすにも詳しくありません」

「いかにも、もう」

「されど、一ノ谷より洛内に帰還してここ数日、配下の者たちに市中のようすを探らせておりましたが、たしかに法然房という聖の名が出ておりました」

「ふむ」

「もとは叡山第一の学徳をうたわれた学僧であつた由にございますが、若くして功名の世を捨て、道を求めて修業したとか」

「ほう」

「その修業というのも凡人にできることではありません。何でも悟りをうるまで

二十五年の長きにおよんだと申します」  
「二十五年か」

「御曹司（義経）には、とりあえず市中のようすを明日にもお報らせすることにしておりましたが、法然房につきましては今お訊ねがありましたので」

弁慶はじつとあるじの顔を仰いだ。

仰ぐといつても、背丈が義経にくらべ各段にたかい弁慶であれば、その視線はおのずと下を見るかたちになっている。だがその心においては、仰ぎ見て義経の指示をまつ気持である。

「して、聖は悟りをえて何年になる」

弁慶の視線を頼にかんじながら、義経は訊ねた。

「承安四年とききましたから、九年ほども以前のことになりましょう。以来、今日まで、寺ももたず、東山の草庵にあつて、ひたすら、たずねくる人々に道を説いている由にございます」

「一度会つてみたいものだ」

弁慶のことばに興味をかんじた義経はつぶやいた。

「して、その教えとはいかなるものぞ」

「浄土の教えとも、念仏の教えとも、人は申しておるようでございます。市中の評判はたかく、民衆が聖をしたう心は、それはもう大へんなもので――」

「明日は早速、その法然房を二位殿におひきあわせ申そう」

弁慶のことばをおわりまできかず、途中でさえぎると義経はいった。

「法然房の草庵へは迎えの侍をつかわさねばならぬが、弁慶、誰ぞおらぬか」

「熊谷次郎直実をおやりなさいませ」

「ふむ、真実をな」

そういう義経の脳裏に、そのとき一つの記憶がよみがえってきた。

一ノ谷の合戦で平家が大敗した日の夕刻、義経は須磨の浜辺近くに陣して、配下の武士たちがつぎつぎに持ってくる平

家の武将たちの首検分をしていた。

とそこへ、慌しく真実がかけこんできたと思うや、血にまみれた錦の小袖につつんだひとりの美少年の首を、義経にさしだしたのである。

そして、

「熊谷次郎直実、修理大夫平経盛殿の子息、平敦盛十七歳を、須磨のなぎさにて討ちとつて候」

と大音声にいうやいなや、がばとばかりにその場に伏して、男泣きに泣きだしてしまつたのである。

義経がそのことを思い出していると、弁慶がいった。

「真実は、一ノ谷でわが子と同年の平家の子息を討ちとつてしもうたと申して、荒武者なれど直情径行の男にございますれば、菩提をとむろうてやりたいと、口をひらけば嘆いている由にございます。この真実をおつかわしになるのがよろしうございましょう」

(続く)

連載 雑誌『浄土』を支えた人々

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊「念佛読本」執筆者たちの足跡

# 列伝

近代の一遍・徳本

中野善英（剋子）上人



土屋光道

上人は明治三十一年八月、愛知県海部郡立田村に生まれ、十一歳で松坂市安楽寺香月善隨の弟子となり、東海中学を経て宗教大学（現・大正大学）に学び、大正九年教育部、同十一年宗教部本科を卒業された。その十一月、海部郡津島米之座西光寺に晋董し中野姓を継がれた。

大学時代からの親友で、生涯変わらぬ親交のあった前浄土門主、知恩院門跡藤井実應親下は、上人を追慕して、

「中野上人は宗教大学の先輩として学生の頃からご指導を頂き、在学中ご一緒に各地の別時念仏会や講演会に参加し、名僧先達を尋ねてお話を聴きにまいりました。宗教宗派を問わず、信仰篤き方々のみ教えを聴いたり、夜を徹して、共に念仏させていただいたことが、なつかしく、有り難く思い浮かんでまいります。大学をご卒業になられてからは、求道と伝道に身を捧げられ、自らの深い宗教

体験をとおして、生涯布教に尽くされ、無数の人々をお導きくださいました。私も遷化（昭和四十一年）されるまで、たびたびお励ましのお便りをいただき、拙宅にもたびたびお泊まりくださいました。まさに、生涯にわたって親しくご指導をいただいた善知識であります。寸暇をおいといなく、まわりにあるものや、目の前にあるものを写生されて、感想をしたためられ、開眼された心境を色紙、短冊条幅等に筆硯、躍同表現され、また、ブラットホームで汽車を待つ間や、ご法話のあい間にも、信者へのお便りをしたためられておられました。上人こそ、真の宗教家、真の念仏者、真の伝道者であられた。徳本行者の再来か、あるいは現代の一遍上人と申すべきか、不断に念仏された方であり、念仏し、念仏の中のご説法であつた」と讃歎しておられる。

上人は卒業後、東京神田駿河台に「如来中心主義」の看板を掲げた光明教壇の土屋観道

に師事し、その「真生同盟」の教化を扶け支えた。

さらに昭和十五年に自ら「一味会」を創設し「剋子」と称し、爾来四十有余年、文字通り生涯を貫き、辺幅を飾らず、名利にかかわらず、ひたすら専ら称名に精進、東西奔走、寸暇を惜しんで布教伝道に全精神を傾けられました。

大学卒業当時より、その人格と篤信はつとに注目され、昭和九年（三十六歳）には、大本山増上寺より依嘱を受け、『徳本行者』（三縁叢書）を執筆。ついで同十一年の本誌『浄土』の特集号『念仏読本』に、当代を代表する碩学教授陣の執筆者の中に最年少の中野善英が選ばれました。

上人はその一生、まさに行往坐臥、時節の久近を問わず念仏を称えられ、その日々が、念仏を離れず、念仏からわき出す御生活でした。そのことは『徳本行者』冒頭に自ら、

「念仏の講釈をする人は多いが、実際に、お念仏を申す人は少なくなつた。いわんや、これを真に身におこなう人はなおさら少ない。信仰は学問をして、学問の中からわかるものではない。生きてまします宇宙の大霊、如来の大生命に触れて、初めて、その感應を受け、自己の中から、仏の働きが覚醒してくる時、信仰である。だから信仰を求めるのには、ただ一途、如来のみ胸へ、驚直にぶつつかつてゆくことである。それがために、古来の先徳は、参究を重ね、帰念に帰念を累ねて直進された」

と説かれる通りの念仏精進の日常でした。

そうした宗教体験の中から、阿弥陀仏信仰は、死後の極楽往生のためでも、追善供養のためでもない、「念仏の中から、常に個人が目覚め、家庭、国家、社会が、正しい方向へ進んでゆく実績が出て来なければならぬ」。

——昭和十四年より創唱する「一味」の教

え、「一味哲学」は、「天地は一心一体一生命一活動なり、これを神と云い仏と云う、又道と謂い教えと云う」を本態論とし、その目的は「この天地宇宙のいのちの根源（阿弥陀如来）に向かつて帰依し、畏敬し、それを宗教的生活に高め、社会文化発展に寄与する靈的存在として」自己の人格を向上させて行くことにある。その実践が念仏行であります。

こうした信仰を、上人は極めて易しく信者に説かれた。日常身の事象、特に自然界の神秘を得意の絵や詩句に表現して、色紙、揭示伝道、カレンダー、手書きのハガキ、またアイディア豊かな信仰味あふれるカット入りの冊子数十冊発刊。さらに機関誌「一味」を毎月発行、毎月一万部、四十数年一回も欠かさなかった。その伝道生活は全国各地の寺院や個人宅、商店や工場の月別例会と寸暇を惜しんでの旅から旅への超人的不惜身命の活動で、津島の自坊に帰るのは月二回の数日のみ

というご一生でした。

その各地例会も、信仰法話以上に念仏実践の集いで、特に津島本部道場の月例会仏会、毎年四月三日間の全国大会、各地恒例の別ת念仏会、特に比叡山飯室谷に独参工夫して達成した独創的称名法「大念仏」を晩年に公開、仲秋名月に結集し、樹下石上に徹宵念仏する叡山念仏は、まさに「決死道場」と銘打つ程の真剣御指導でありました。

「偉大な古来の先徳は、みな宇宙の大霊、如来の大生命に帰依し、天に向かつて祈り、地に伏して拝み、大自然の中に自己を投げ込んで、大自然の中から生命を汲み取って復活された。決して誰ひとりとして、単なる一句半偈の文字学問の人ではない。みな如来の中に没入し、如来に因って生かされている人ばかりである」（『徳本行者』）と申されたが、まさに中野善英上人ご自身、その一人でありました。

三心の中に、至誠心をようようにこころえて、ことにまことをいたすことを、かたく申しなすともがらも侍るにや。しからは弥陀の本願の本意にもたがいて、信心はかけぬるにてあるべきなり。『念仏大意』

『仏説阿弥陀經』

三心のうち、至誠心をさまざまに理解して、「（私たちは凡夫であるから）真実の心を発することなどなおさらできようはずもない」と申す輩などおりましょうか。もしそうであるなら、そうした人は阿弥陀さまの本願の御意を履き違え、信心が欠けてしまっているに違いありません。

至誠心（まいまごころ）

去る五月晴れの日、息子の通う小学校で運動会がありました。子供たちは、松組と桜組に分かれて優勝杯を狙います。綱引き・玉入れ・くす玉割り・騎馬戦など、熱戦が続きます。同点で迎えた最終種目は、学年選抜による各組対抗リレーです。抜きつ抜かれつの一進一退。応援合戦にもおのずと熱が入ります。「ガンバレー！ガンバレー！」子供たちの熱気に押され、観覧席も一様に盛り上がり、かくいう私も手に汗握った者の一人です。子供たちも父母も「まことの心」に満ち溢れていました。

至誠心「まことの心」は、お念仏を称えて浄土往生を願う際に具えるべき三心の一つで、身と口と心に「まこと」を具え、内面と外見が裏腹でない心をいいます。ところが、この至誠心の理解について、証空上人の浄土宗西山派や親鸞聖人の真宗などは「煩惱具足の凡夫である私たちには至誠心など発せよう筈がない」などと、三心とは本来仏の側にあるもの、あるいは、仏の側から施されたものとして理解し、拳句のはてには「だから浄土宗の理解は間違っているの

だ！」と批判するようになってしまいました。なるほど、こうした理念的・観念的な言い回しは、頭でつかちになってしまった私たち現代人の持つ知的欲求には実にうってつけです。けれども、冒頭のご法語のように、法然上人自らもそうした主張の誤りを指摘です。そして、そうした物言いを耳にするにつけ、私は、お念仏の教えに出会うまでの法然上人のご遍歴に思いを馳せ、私たちの現実のありさまをしつかりとお見つめになられた上人の深い洞察にあらためて感服させられるのです。

いったい、法然上人のご遍歴の出発点はどこにあるのでしょうか。それは、比叡山を中心とする上人以前の仏教各宗派の教え、すなわち、その説き方こそ異なれ「本来、私たち衆生は仏そのものである」という理念・観念にこそ溯ることでしょう。ところが上人は、本来具わっているはずの仏の心がまったく働かない私たちの現実のありさまを決して見逃さず、そんな私たちでも救われる道をお求めになり、ついにお念仏の教えに辿り着かれたのです。

仮に、西山派や真宗のように理解し得たとしても、その心はどうすれば知ることができるのでしょうか、あるいは、阿弥陀さまからこの上ない真に清浄な至誠心を賜っているにもかかわらず、どうして悪しき心ばかりが沸き起こってくるのでしょうか。もちろん、そうした素朴な疑問に対しても、理念・観念で応ぜられるのでありましょう。もしそうならば、至誠心とはなんと難しい心でありましょう。

法然上人は、そうした虚しい理論・理屈に陥りがちな理念や観念の世界を離れ、ありのままの私たちが生き、実感・実践できる現実の世界にはつきりと焦点を据え、浄土往生を願って「ただ一向に念仏すべし」とお示しになったのです。それはちょうど、子供たちとその父母が、勝利を願う「まことの心」で「ガンバレー！ガンバレー！」と声を枯らして応援していたように……。合掌

往生は よにやすけれど みなひとの

まことの心 なくてこそせね（法然上人）

（大正大学講師 林田康順）

# こどもの俳句

真壁保育園園児の句集(第九号)「はいく」より

編集部選

## 3 歳児

なんでなのゆかちゃん四つまめのかず  
たこあげてほくもいっしょにあがりそう  
ふゆのあさゆびでらくがきバスのまど  
さむいあさみんなかいじゅうしろいき  
おそらからはやくでてこいしろいゆき

## 4 歳児

ゆきだるまにんじんのおはなかわいいね  
こままわしほくもいっしょにめがまわる

細谷優花

内田周汰

鈴木莉緒

古橋悠雅

長岡佑治

齊藤京介

大塚諒太



けむりはねそらとなかよしたのしそう  
ちゅうをしておかしをたべたのばれちゃった  
へりこぶたーふじさんめがけいっちよくせん  
いちごがりおくちのなかはまっかつか  
かめさんにのるといけるのりゅうぐうじょう

## 5歳児

2000ねんおとしだまは2000えん  
ながれてくほしのきょうだいたのしそう  
おおかぜだはっぱがゆらゆらこいのぼり  
イチヨウのはきいろくなっておしゃれだね  
どんぐりのぼうしがぬけてかわいそう  
うちのねこいつもおそとでうんどうかい  
はっぱさんくるくるとんでぶどうかい  
かぶとむしどすこいどすこいあるいてる

小田部瑞生

市塚ななみ

藤田政人

今泉裕勝

桜井怜那

武村美和

成田大樹

潮田翔太郎

沼田静紅

根本つかさ

高久梨穂

伊東里枝

川津昌紀

# 浄土宗と浄土真宗の違い

仏教ルネッサンス、再び  
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

## 念佛讀本

執筆一覽

石眞大佐中椎  
井野野藤村尾  
教正法賢辨辨  
道順道順康匡

稲小佐江島笹  
垣西藤藤野本  
眞存春澄禎戒  
我祐夫英祥淨

中松梅矢井  
野浦原吹川  
眞慶定  
善英一隆輝慶  
(目次登場順)

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

お線香の上げ方、お焼香の仕方については、各宗派でそれぞれに決まりがあり、決して一様ではありません。

よくご葬儀のお焼香で、前の人のとおりにならうと、後ろから前の人の仕方をのぞき込んで、いる後景を目にしますが、確かに回数や仕方は宗派によって違っているようです。しかし、ほとんどの宗派では、それほどうるさく言いませんが、こと浄土真宗に限っては、はっきりと回数と仕方を示しているように思

われます。

まず浄土真宗では、お線香は香炉に決して立てることはいたしません。長いお線香であつても、香炉に入るように短く折つて火をつけて寝かせます。したがつて本数にはこだわらないといえます。またお焼香は、本願寺派では一回、大谷派では二回と決まっているようです。そして香をつまみあげた時に、おしただくということはないのはつきり定めています。

浄土宗ではどうでしょうか。

## その5 お焼香

お線香は朝、晩のお参りの時は二本。それ以外のお参りでは一本、お焼香は、通夜葬儀の時は一回、それ以外では三回ということに一応なっているように感じられますが、どうもはつきりした決まりはないようで、一回でも、二回でも、三回でも、また一本でも二本でも三本でもよいとなっています。ただしお線香はまっすぐに立てること、またお焼香は恭しくおしいたいでく、べることになっています。

(つづく)

■申し込み・問い合わせ■

法然上人讃仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話：03-3578-6947/FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

●緑陰

〈特選〉

緑陰やままぶことらしき声二つ

山本のり子

木陰に女の子の声がしている。どうも二人でままぶことをしているらしい。葉っぱの食器に草花やら何やら、食材は豊富である。作者は幼い頃の思い出をそれにかさねているのだろう。ほほえましい一句である。

〈佳作〉

緑陰に助っ人もいてへボ将棋

中島一子

緑陰の風道に止め乳母車

片桐てい女

緑陰に人を呼び込む献血車

北川弘子

●西瓜

〈特選〉

ふるさとの西瓜の模様濃く太く

玉置史彦

帰省したのか、送ってきたものか。縞の模様が特に濃く感じられるのは、ふるさとものだからだろう。そこにふるさとへの思

## 選者=増田河郎子

〈特選〉

## 更衣退院という別れかな

野村昭輝

## ●自由題

いが込められている。中が真赤なことは、切る前から間違いないのである。

〈佳作〉

合宿や流れに冷やす西瓜二個

片桐てい女

西瓜提灯紅残れるをともしけり

金谷友江

青空を見上げ真赤な西瓜食ぶ

大村和代

退院するほうか送るほうか。どちらにしても

もめでたい別れだが、どれだけかを一緒に過ごした仲ともなると、少しはさびしい思いも

残るだろう。退院のための着替えが更衣である。こういう更衣も別れもある。

五月雨や声脈やかな女客

〈佳作〉

長靴をたたきつはきぬ梅雨の庭

中島一子

梅雨の戸を締めて女の長電話

浦田ちる

板倉左武朗

45

緑陰

緑陰の風々々々と理髪店  
 緑陰や明日を語らふ老夫婦  
 緑陰に妻車椅子押しくれて  
 緑陰の落人村に歩をとどめ  
 緑陰に集ひて稚児の出を待てり  
 緑陰やかかの友の顔敵の貌  
 緑陰や黄昏時の黒マント  
 緑陰の中で一息宮大工  
 緑陰に切株磨く人の風  
 緑陰に本を持つ人こつくりと  
 緑陰の中より見ゆる太師堂  
 緑陰に好みの陶の椅子とがす  
 緑陰の石蹴りの子ら声高に

河合富美枝

長尾子浪

上野明達

佐藤雅子

金谷友江

武田三太

安藤白玉

浜口佳春

石原新

近藤魚夢

谷しげ子

増田信子

山口信子

西瓜

ボンボンと叩き西瓜の品定め  
 文書くと園児の絵手紙西瓜かな  
 職人の屋根よりおりて西瓜食ふ  
 西瓜売り朝の空気の澄みにけり  
 裏庭の古井戸なつかしスイカ食む  
 合宿の大テールや西瓜切る  
 父ゆずり西瓜の皮の一夜漬け  
 七夕の笹に結んだ切西瓜  
 初物の西瓜供えて忌日なり  
 棚経終る清涼あふるる西瓜かな  
 西瓜下げ立つかな地図の現在地  
 大西瓜川につないでふるさとなり  
 自由題

加藤政男

小林恵美

北川弘子

井村善也

山本のり子

河合富美枝

長尾子浪

中島一子

佐藤雅子

上野明達

長谷川裕

吾妻あき

浄土誌上句会のお知らせ

季題

月里芋自由題

締切・九月二十日

発表・『浄土』十一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内  
 月刊『浄土』誌上句会係

手のひらに雨の気配や芥子坊主  
 カンナ燃ゆ少女降り立つ無人駅  
 守り札戸締りもなき海女の小屋  
 地に灼けて鉄棒の影水平に  
 誰が打ちし鰯口の音や梅雨晴れ間  
 どの墓も白赤黄の百合かざり  
 手花火や浴衣の模様浮き立たず  
 深呼吸して新緑の寺詣で  
 二年坂三年坂や玉の汁  
 新住職の祝や榎のしげりけり  
 やはらかに稚魚の群呼ぶ女瀧かな  
 二人来るまた二人来る盆の客

片桐てい女

山本のり子

増田信子

島谷ときを

柏瀬房子

上野明達

長尾子浪

佐藤雅子

吉里ひとみ

金谷友江

河合富美枝

蓮門俳子

# 引導

マンガで楽しい仏教用語 漫画・藤井ひろし

「いんどう」を渡す、といえ  
ば、息の根を止めるとか、殺す  
という意味、あるいは殺す一歩  
手前で最後通謀を突き付けると  
いった使われかたをします。  
ですが、本来、引導とは、生  
きている人間に法を教え導くこ  
とをいいました。いまでいう説  
法、ということになります。  
それが葬式の時の死者への導  
きの言葉となり、いつの間にか  
殺すという意味で使われるよう  
になったのです。  
使われ方が大きく変わった言  
葉の一つかもしれません。



## 編集後記

夏の夜黙し語らず犬送る 岱潤

熱帯夜がいつたい何夜あったことだろうか。歴史的暑さの夏もようやく終わろうとしています。そのただでさえ寝れない夜に、愛犬を亡くした人と会った。

人からの聞きついで聞いてみたものの、本人からはなかなか話をしてはくれなかった。子供のいないそのご夫婦にとって愛犬はまさに子供そのものであったことだろう。しかし五十を過ぎたそのご夫婦は、そのことをご自身の言葉で語ることをためらった。

犬の死は、他人にしてみればただの犬の死でしかないが、しかしその当事者にとっては何事にも堪え難い悲しみである。その余りに違う感情の違いの

中で会話をすることを敬遠したのだ。

友人の獣医が、最近はずっと病気にした人が長い時間立ち直れず、病気になるってしまう例が多いという。いわゆるペットロス症候群である。家族のときには通夜葬儀という葬送の儀を行うことによって、その悲しみは癒され、また周りの人々も悲しみを理解してくれるが、ペットではそうした儀式もなく、他者からのありきたりな同情で終わってしまい、当事者は気持ちのやり場がなくなってしまうことが多いのだろう。

愛するものを亡くす悲しみは、その愛した大きさによるのであって、対象によるものではない。

(長)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤  
斎藤光道  
村田洋一  
佐山哲郎  
間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十六巻 九月号 頒価六百円  
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十二年八月二十日

発行

平成十二年九月一日

発行人

真野龍海

編集人

宮林昭彦

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三・三五七八・六九四七

FAX

〇三・三五七八・七〇三六

振替

〇〇・一八・八八・二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害注意



近隣近し、静かに



足元注意



踏切注意



避難口



注意



安心と安全をお届けするのは、  
このマークです。



お断り



破れ物注意



安全第一



歩行者注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

これまで、これから、



マンションは長谷工です。

渋谷区の穂田神社。江戸時代から続く歴史ある神社の建て替えに、長谷工の提案した定期借地権事業が採用されました。土地を手放すことなく、新たな借り入れを起すこともなく、長年の懸案であった新しい社殿・社務所が完成し、宮司様や氏子総代の方々をはじめ、大勢の方から感謝のお言葉を頂きました。

その土地の持つ歴史や環境、そして所有者の想いを正面から受けとめ、最善の土地活用をお手伝いさせていただくこと、それが『長谷工の土地活用事業』です。



日本初、境内地を利用した定期借地権事業  
上は定借付分譲マンション「モアレスト神宮前」

 **長谷工 コーポレーション**  
HASEKO 土地活用営業部門

お問い合わせは

020-548-845

長谷工のホームページ「マンション百科事典」<http://www.haseko.co.jp/>

**FAX 03-3456-5483**

(9:00～17:00 土・日・祝日を除く)